


 巻頭言

## 農業にロマンを —農薬業界としてできること—

農薬工業会会長（クミアイ化学工業株式会社） こ い け 池 よ し 好 と も 智



私は、1954年、長野県長野市に生まれた。幼少期、家の前には水田に水を引く水路が流れ、数軒先の住宅の向こう側には水田が広がっていた。春には耕起、代掻きから田植えが始まり、盛夏の開花、登熟、稲刈りから、はさかけ天日乾燥、脱穀まで、稲作を身近な風景として眺めることができた。今では宅地化、商業地化が進み、当時の面影が全く残っていないことには寂しさを感じる。

大学卒業後、1978年4月、農薬企業に就職し、最初に配属されたのは静岡県清水市（現静岡市清水区）にある研究所だった。当時は、少し山沿いに入ると管理されたみかん畑や孟宗竹が茂る一角がそこかしこにあり、春になると新鮮な取れたてのタケノコを食す機会も多かった。ただ、その一角でも近年は管理する人手が不足し、放棄されたものも多くなったと聞く。

私が身近に感じた農地の変遷の例を二つ挙げた。農地が宅地化、商業地化され、その姿を変えていくことは、時代の流れのなかでは仕方のないことなのかもしれない。

時代の流れの中、日本の食料自給率は2018年度にカロリーベースで37%となり、一向に向上の気配を見えてない。国民の食生活の変化、すなわち米消費が減少し、輸入飼料による生産分も含めた畜産物消費の増加へとシフトしてきたことも要因の一つであるが、将来の日本の農業を考えた場合、自給率の低下問題で危惧しなければならないのは、農業生産基盤の弱体化と言える。

まず、家族経営体の離農による農業経営体数の減少、次に法人化や農地集積は進むが、法人自体も後継者不足が懸念される。水稻地域での法人の後継者不足は、大規模な耕作放棄地につながる。果樹園での高齢農家の離農は、小規模の耕作放棄地でも獣害の巣となり周りの園地に被害を及ぼす。耕作放棄地が日本各地で拡大し、2017年には38万ha以上に及んでいることには大きな不安を禁じ得ない。

また、農業従事者の高齢化が叫ばれて久しい。1960年当時は60才以上の高齢農家率は2割程度であったが、2015年現在60才以上が約8割を占める。後継者育成が急務な状況で、新規就農として二つの流れがある。一つは、60才で定年退職した人達が実家の農家を継ぐ事例と、若年労働者が農業法人に雇用され新規雇用就農者となる事例である。これらの方々が産業としての農業に魅力を感じていくことが大切であると考えている。

当会は、農薬業界として日本の農業にどのような貢献ができるかについて考え、「JCPA VISION 2025」という

ビジョン活動を推進している。ここで、その中の二つを紹介したい。

第一に、国内農産物の安定生産に寄与できる農薬を今後も提供していくというハード面の支援である。これまで、農業生産性の向上のために、除草作業の大幅軽減を実現した除草剤など、低毒性薬剤、有効成分投下量を大幅に低減した高活性薬剤の開発、また、航空散布に対応した薬剤や水稻の育苗箱施用剤等、機械化、省力化技術で貢献してきている。直近では、新たな技術革新で期待が高まるスマート農業を重点課題と捉えている。安全優先の視点を忘れずドローン散布に対応した新規製剤の開発、さらには現場ニーズに応えた製剤や散布技術の開発等により、スマート農業のさらなる後押しをしていきたい。2015年国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」に照し合せると、SDGs目標8「働きがいも経済成長も」や目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」につながる活動である。

第二に、生産基盤を支える後継者となる方々に、食料生産の重要性と農薬の適正使用等の正しい知識を提供するというソフト面の支援である。当会HPを充実し、農薬を使用する方々への情報として「農薬の正しい使い方」や「食料生産の重要性と農薬の役割」の動画を閲覧できるようにし、要望があればDVDを提供している。新規就農者向けの研修会などで利用されていると聞いている。その他、農薬の安全性や適正使用等に関する講師派遣事業、直売所に直接農産物を納める生産者向けのセミナー開催、さらには2019年度から当会支部会員が都道府県のJA巡回を行い、直接面談方式で先に紹介した動画や農薬安全使用リーフレット等を説明し、農家の方々への啓発活動に役立ただけのように取り組んでいる。また、これからの若手就農者への支援として、「新版農薬の科学」を全国47都道府県の農業大学校に寄贈している。これらはSDGs目標12「つくる責任つかう責任」や目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」につながる活動である。

これらの活動により、農業に従事する方々がロマンを感じていただければ幸いである。

（日本植物防疫協会理事）

